

[書 評]

Didier Caluwaerts & Min Reuchamps (eds.),
*Belgian Exceptionalism : Belgian Politics
between Realism and Surrealism,*
London : Routledge, 2022.

——ベルギー政治学研究書からみる研究関心の変容——

津 田 由 美 子

本書はベルギーの研究機関に所属する研究者によって書かれた、ベルギー政治学の現在の成果を伝える書籍である。本稿では、この書籍の内容紹介を中心に、それ以前に出版されたベルギー政治に関する英語文献を含めて、比較政治学としてのベルギー政治学研究の展開を明らかにしたい。

ベルギー政治学研究者が他国に発信する際に、共通するのは、「なぜベルギーなのか」という問いから入る点である。本書でも序章 (p. 2) が語るように、ベルギーのような小国かつ激しい政治変動を経験しない国が、広く政治学研究者の関心を集めることは難しい。それゆえ、政治学研究の対象にベルギーを選ぶ意味は何か、その「弁明」の必要性が強く意識されるのである。そこで語られるのが、分断化された社会の政治的安定というパラドックスであり、他に例をみない矛盾に満ちた不可解な社会という例外性の強調である。本書のサブタイトルは、*West European Politics* 誌の特集号を一冊の本にして刊行された、*The Politics of Belgium: Institutions and Policy under Bipolar and Centrifugal Federalism* (2009) の最終章、アメリカ人研究者ピーターズ (Peters B. G.) のタイトルを引用しているが、過去には、この国のシュールレアリスム画家であるマグリットの絵画やカフカの迷宮がそのイメージ付けのために動員されたり、「政治学の実験室」という表現が用いられたりもする¹⁾。

この「儀式」に加えて、政治学としてのベルギー研究の正統化に使われるのが、レイプハルト (Lijphart, A.) の「多極共存型デモクラシー (Consociational Democracy)」である。

ベルギー政治が、国外の研究者の関心を集めることになったのは、レイブハルトの小国研究に基づく「多極共存型デモクラシー」の「発見」によるところが大きい。レイブハルトは、民主主義研究における功績をもって高名なオランダ出身の研究者であるが、社会が深く分断されているにもかかわらずデモクラシーが相対的に安定しているメカニズムを、多数決と二大政治勢力が競うアングロサクソン型とは異なる民主主義のモデルとして提示した。オランダ以外に、オーストリア・スイス・ベルギーがこれに該当すると分類され、ベルギーは比較政治学の国際舞台に躍り出たのである (Lijphart 1969)。

しかし、ベルギー人研究者がレイブハルトの理論をそのままベルギーに受け入れたわけではない。英語圏で注目されたレイブハルトに対して、比較政治学のステージでのベルギー研究を強く意識したのが、ベルギー人のヘイセ (Huysse, L.) である。彼は、ベルギー政治学の数少ない学会誌の一つだった *Res Publica* に、「ベルギーの政治、柱状化、合意形成について研究がある15人のアングロサクソン系著者 (Vijftien Angelsaksische auteurs over politiek, verzuiling en compromisvorming in België)」と題する論文を寄稿した (Huysse 1975)。現在では古典となったローウィン (Lorwin, V.) や、アーウィン (Urwin, D.)、ゾルバーク (Zolberg, A.) らを対象に、そのベルギー研究について評価をし、今後のベルギー研究においては、外部からの視点を活かした比較分析、政治学概念の活用、データの適切な処理が必要であると結論づけている²⁾。この論文は、ベルギー国内の研究者に、英語圏での比較政治学のアプローチを意識させる第一歩となった。

ヘイセ論文の背景には、若手研究者から、歴史経過や現状の叙述にとどまらない、より理論的で分析的な政治学への関心が育ってきたことがある。それまでは、小国であるという事情に加えて、狭い国内にもかかわらず公用語が地域別に異なっていたこと、研究機関も特定の「柱 (区画化されたサブカルチャー)」に属しているなど、相互の連携を築きにくい環境であるがゆえに、ベルギーを一国単位で政治学の対象として取り上げる関心と需要は決して高くなかったのである³⁾。

レイブハルトの名声に依拠しながら、一定の距離を保とうとする姿勢は、他の研究者にもみて取ることができる。上記の *The Politics of Belgium: Institutions and Policy under Bipolar and Centrifugal Federalism* (2009) の第2章で、ベルギー政治学の重鎮であるデショーウエル (Deschouwer, K.) は、ベルギーを英語圏に紹介したレイブハルトとベルギー政治学との関係性を振り返るという任務を委ねられている。ベルギーを対象にした場合のレイブハルトのある種の恣意性を、連邦化以前に絞ってより厳密に考察したハイセの研究と比較しながら批評する。レイブハルトの多極共存型デモクラシーが

機能したのは、宗教や階級の亀裂をバランスよく内部に抱えていた政党ならびに有力利益団体が重要な役割を果たして、交渉に基づく協調を可能にしていたからであった。しかし、1960年代に政治化を強めた言語の亀裂は、それぞれの組織の分裂を招き、これまで築き上げた調整方法の実効性を弱めることとなった。ベルギー政治への関心は、この言語対立と制度改革としての連邦制の議論に、その重心を移していく⁴⁾。

デショーウェルは、政治学的にバランスのとれた概説書と高く評価されている『ベルギーの政治 *The Politics of Belgium: Governing a Divided Society* (2009) (改訂版は2012年)』の著者でもある。新しい言語・領域的な亀裂は従来の宗教・階級の亀裂とリンクしており、その交錯度ゆえにオランダ語系キリスト教民主主義政党とフランス語系社会主義政党を中心とした政党政治が、ベルギー・デモクラシーの鍵を握ってきたことを重視する。そしてこの分析を踏まえて、連邦化にともなうベルギーの政党支配体制の変容が、政治にどのような影響を与えていくかを注視すべきだとする立場をとっている。

これらの研究業績ののち、2022年に発表されたのが、ここで取り上げる *Belgian Exceptionalism* である。本書は、3つのパートに分かれ、序章と13の章で構成されている。多くの章は、オランダ語系とフランス語系の研究者の共同作業によるものであり、フランス語系とオランダ語系、両方の視点で考察・執筆されていることを明確に示す意図をもつ (p. 4)。本書で論じられているテーマは、従来から英語圏の学会報告ならびに学会誌への寄稿という形で、個々の研究者が成果を発表してきた内容と重なる点もみられるが、フランス語圏ワロニー地域とオランダ語圏フランデレン地域、さらにベルギー連邦制を独自のものとしている二言語圏ブリュッセル地域のすべてを扱う「ベルギー」研究として、ここでまとめられた意義は大きい。まさに総力戦ともいえる内容の本書である。豊富なデータをもとにした分析が活用されており、ベルギー政治学界がデータ集積に積極的に取り組んだ結果、研究手法が多様化し精度の高い内容になっている。とくに、国内の大学の研究者が連携する共同プロジェクトが企画され、研究者の人的交流が進み、集められたデータの共有が円滑に行われたことが、研究水準の向上をもたらしている⁵⁾。デショーウェルが編者に回った、*Mind the Gap: Political Participation and Political Representation in Belgium* (2017) でも、約10年間にわたって集められたデータが活用されており、本書を含めてデータ解析を重視する政治学研究の傾向はベルギーでも顕著である。

全13章の内容としては、これまでの類書には含まれていなかったテーマに言及されていることが特徴的である。以下、複数の章を紹介しつつ、その新しさと本書の意義を考

察する。

第1部「第一線に立つベルギー」では、一見アナクロニズムのベルギーが、今や（結果的に）時代の最前線を走っていることを示すテーマが選ばれている。第1章では、低投票率に悩む諸国で代表制民主主義の正統性を回復させる処方箋になるのか、しばしば議論にのぼる義務投票制について、19世紀に導入され現在も続いているベルギーでの政党支持率への影響を、各種データに基づいて検証している。ベルギーにおいては、投票所に向かう有権者の政権批判票として、政権に参加しない両極の政党に票が集まりやすいという議論もあり、さらなる考察が待たれている。第2章では、カトリックの伝統的な家族観と保守的なジェンダー意識が続いていた社会で、政治家主導で採用されたクオータ制が女性の政治進出にどのような効果を生んでいるのか、さらに第4章では政治エリートへの委任に基づく閉鎖的な政党支配体制のなかで広がる、熟議デモクラシーの動向についての論稿が掲載されている。2011年から始まったミニパブリック・プロジェクトは、柱状化社会のエリート協調の機能が後退し、政治に不信感を強める市民に対して、政党主導で新しい政治参加の方法を模索する試みだとして、その可能性と課題が提示されている。

第2部は、「悩めるデモクラシー」として、政党政治の機能不全とベルギー連邦制の抱える諸問題が取り上げられる。政党政治の変化に焦点を当てたこのパートが、本書のなかで英語圏の比較政治学におけるベルギーの位置づけを最も意識した内容になっている。第5章では、フランデレンの急進右派ポピュリスト政党が政党政治に与えた衝撃と、反民主主義の政党とみなして政策決定過程から排除すべく主要政党が採用した、防疫線（*cordon sanitair*）戦術について検討している。この戦術は、1991年に反移民政策を強調してフラムス・ブロック（現在のフラムス・ベラング）が急伸した当時から続けられており、オランダやデンマークなど周辺諸国の急進右派ポピュリスト政党が政権に加わる一方で、ベルギーでは頑なに維持されてきた。しかし、他方でその効果には早くから疑問が呈されてきたのも事実である。より穏当な新右翼政党（新フランデレン連合：N-VA）の拡大で一時は支持率が激減したが、N-VAが政権に加わると、フラムス・ベラングは政権への批判票を吸収して再拡大の傾向をみせた。2019年3月の世論調査では、フランデレンで最も支持される政党にまで達しており、本章は最大政党の排除の是非をめぐる代表制民主主義の議論を踏まえて読まれるべき内容である⁶⁾。

連立政権が常態のベルギーで、エリート間調整の主要な舞台は、選挙後に行われる新政権樹立に向けての交渉である。国王が交渉仲介者を指名する形式で進められる連立政

権形成の作業は、言語対立から生まれた協調方式に則して、同一言語の政党間での調整と言語を異にする政党間での調整の両方を必要とするために、これまでも長期化する傾向があった。しかし、第7章で指摘されているように、連邦化が政党の断片化（バルカン化）に拍車をかけ、言語圏を横断する姉妹政党は連邦レベルでの連携よりも固有の政策的利益を追求する傾向を強めており、合意形成はいっそう困難になっている。選挙後の慣例となった、政治エリートの攻防が招く数カ月に及ぶ政権の不在は、有権者の政治不信と諦めを助長する。その空白を繋ぐ役割を果たすことになるのが、暫定政権（caretaker government）であり、ベルギーで存在感を増すこの形態の政権について、取り上げたのが第8章である。政府の人事面での安定性や政党支持率に与える効果について、正式の政権時と比較するという、何度も繰り返し誕生するベルギーならではの分析がなされており、さらには政権が長期化することにより、暫定的な政府が委ねられている権限を越えて新規の政策決定にまで活動範囲を広げる傾向が指摘されている。他国との比較可能性は限られているが、危機に対応する民主主義の一つの形態として問題を捉えることができる。

第9章では、遠心力を抑制するための連邦化がさらなる遠心力を生み出しているという、ベルギー特有の「連邦化のパラドックス」が取り上げられている。連邦化は言語対立の緩和策として主要政党が導入に踏み切って進められた政策であるが、妥協の積み重ねとしての連邦化であるため到達点が定まっているわけではない（連邦主義なき連邦化）。連邦化の進行は政党間で異なる反応を引き起こしており、オランダ語圏の政党は、言語と地域に基づくアイデンティティから分離主義的思考が根強く、連邦構成体へのさらなる権限移譲が主張される。他方で、フランス語圏の政党においては、国家の統一性や効率性を損なうという理由で、連邦化に一定の歯止めをかけて連邦政府の再強化を図るべきだという考えが広がっている。2007年の選挙以降の分析では、政党間および同一政党内でも連邦化への対応に差があることが明らかになっており、しばしば指摘される有権者の意識と政党の立場の乖離を含めて、政策分野ごとの議論と検証により、多文化国家における連邦主義政策の展開について、研究の進展が期待される。

本書の最後となる第3部は、「ベルギーと世界」のタイトルでまとめられている。ヨーロッパの「十字路口」に位置する小国は、国際情勢の変化に左右されつつ、国内における多様性と統一を両立するための調停の作法を磨いてきたが、これまでの類書では国際協調を目標とするヨーロッパ統合モデルの先駆者という、小国を評価する際の常套句で簡単に処理されてしまうことが多かった。しかし、本書では、具体的なテーマを設定

して、より踏み込んだ考察がなされている。

第3部最初の第11章「ベルギー国民の過去の連邦化」は、本書のなかでやや異質な政治史を扱っている。「記憶の政治」の文脈で、両大戦時のドイツ軍への協力者問題と、植民地保有国としての責任問題が取り上げられているのである。オーラルヒストリーの成果も積極的に活用されており、近年の歴史学の動向を踏まえた考察が展開される。言語対立の文脈が歴史解釈を左右するというこれまでの研究に一定の言及をしつつも、個別の史料に真摯に向き合うことで、ベルギー史の多様性に光を当てようとした論稿になっている。第12章はベルギーの政党がEUにどのような立場を示してきたかを、政党のプログラムと組織の面から分析している。国際関係に翻弄されてきたベルギーはヨーロッパ統合の中心都市ブリュッセルを擁して、国益に合致したEUを所与のものとして受け入れてきたとされている。これまでもベルギー政治学でEU研究は進められてきたが、ベルギー国内政治と関連づける研究関心は強くなかった。著者が認めているように着手されたばかりであるが、今後の研究の蓄積が待たれる分野の一つである。最終章となる「国連安全保障理事会におけるベルギー」では、ベルギーが国際社会の調停者として主体的な役割を果たしてきたことが示されている。「19世紀の国際政治が産み出した偶然の産物」であり、大国の緩衝国であることが存続できた理由だとされた小国が、植民地大国であった過去から築いた外交手腕や、第二次世界大戦後に欧州統合に加えアメリカとヨーロッパの橋渡しに寄与したスパーク (Spaak, P-H.) の思想を引き継いで、一貫して国際協調に積極的な政策を打ち出してきたことが指摘されている⁷⁾。ベルギーの外交については、冷戦期のコンゴ独立時の混乱に対して無策であったとして、国際的に低い評価が定着しているが、今後は外交についても多角的な研究により、比較政治学への貢献が期待できる。

以上のように、ベルギーの比較政治学は、国際的な研究動向に眼を向け、共同研究でデータを集めて解析するなど、インプットとアウトプットを活発に行っている。他方で、近年の政治学の研究業績をみる限りにおいては、かつて政治学の重要な一分野を占めていた政治史的なアプローチは、後退しているようにも見える。もっとも、1990年代までに優れた戦間期の研究が数多く公表されており、言語対立や連邦化を考えるに欠かせないフランデレン主義運動についての蓄積も多い。また、20世紀末からは脱植民地化をテーマにした研究が進められるなど、歴史学としての政治史研究の高いレベルは維持されている。今日のベルギー研究者が、これらの成果を取り入れて研究関心を広げているのだとしたら、ベルギー比較政治学はますます充実したものとなる⁸⁾。

各国の政治は、それぞれの特性を持つ。「^{エクセプションナル}例外的」で「^{パラドキシカル}逆説的」なベルギーの政治には、どのようなアプローチが適しているのか、現実を前にしてその豊かさを認識し、様々なアプローチを組み合わせていく丁寧な試みが、今後も続けられる必要がある。

注

- 1) たとえば、フォックスの著作 (Fox 1994) の表紙にはマグリットの「光の帝国」が使われており、ベルギー・シュールレアリズムの代表的画家に象徴させることで、ミステリアスな小国というイメージを先行させる効果を生み出している。またベルギー人作家でジャーナリストのファン・イステンダール (Van Istendael, G.) もエッセイに『ベルギーの迷宮 (Het Belgisch Labyrint)』のタイトルをつけており、オランダ語圏のベストセラーとして改訂版を重ね、フランス語にも翻訳されている。「政治学の実験場」との表現を用いたのは、第二次世界大戦後に連邦制に着目した最初の概説書としての『ベルギー政治 (*The Politics of Belgium: A Unique Federalism*)』を著したフィツモーリス (Fitzmaurice, J.) である。欧州委員会に勤務していたこのイギリス人の著作は、実務家としての高い情報収集能力を活かして、中央集権単一国家から連邦国家へ、国制改革が進むベルギーの政治について、歴史、経済、政府、政党、社会団体はもちろん、外交政策に至るまでを網羅している。改訂版として出された1996年の著作では、連邦制の導入に至る政治過程と、独特の連邦制の複雑さに焦点を当てており、長年にわたりベルギー政治に関する入門書として国外の研究者を含めて参照されるに値するものとなっている。初版本には、首相経験者で当時の外相であった、オランダ語系キリスト教民主主義政党のティンデマンス (Tindemans, L.) が巻頭の辞を寄せており、1996年の第二版では、当時のフランス語系社会党党首であったスピタール (Spitaels, G.) がその役割を務めている。フランス語系社会党はフランス語圏の最大政党であり、ティンデマンスが所属したオランダ語系キリスト教民主党と並び、ベルギー政治の中心政党であった。ティンデマンスもスピタールも、ベルギーの連邦化に深く関与した有力政治家である。
- 2) ヘイセ自身は、分断し区画化された社会における民主主義の安定という関心をレイプハルトと共有しながら、政治による調和の側面よりも、エリートに指導された社会の受動性やエリート主義がもたらす停滞に批判を加えた研究者である。1990年代からはベルギー政治社会の問題に広くコミットすると同時に、レイプハルトと同様に途上国におけるデモクラシーの実践に関心を移した。
- 3) 1959年に創刊された *Res Publica* は、フランス語の雑誌としてスタートし、創刊の挨拶もフランス語のみであり、1960年代後半でもオランダ語で掲載された論文は少数であった。1968年にルーヴァン大学が言語問題で分裂するが、ごく一部の例外を除いて、オランダ語系の研究者がオランダ語で論文を発表するのは、1970年代になってからである。その後の *Res Publica* は、オランダ語系の大学 (研究室) が編集を担当する時期が続いたが、出版社がベルギーからオランダに移ると、2018年に

最終号を迎え、*Politics of the Low Countries* (elevenjournals.com) に引き継がれた。ただし、研究者は国際的評価の高い学会誌への寄稿を好む傾向にあり、ベルギー政治学の水準を伝える役割はほぼ終えたといつてよいだろう。新雑誌の創刊号の最初の論文は、2010年代のベルギーの政党が、依然として多極共存型モデルの政党の特徴を備えており、政治体制において中心的役割を果たしていることをデータに基づいて結論づけるものとなっており、比較政治学の舞台にベルギーを登場させたレイブハルトに敬意が払われている。

- 4) 1980年にカリフォルニア大学（レイブハルトの所属機関）で、ベルギー建国150周年を記念して「ベルギー：二言語国家と社会」と題したシンポジウムが開かれた。このシンポジウムをもとにレイブハルトが編集した著作（Lijphart 1981）で、ベルギーは多極共存型デモクラシーの事例として論じられているが、次第にレイブハルトは、「コンセンサス・デモクラシー」の用語でデモクラシー論を展開するに至る。社会構造を視野に入れた以前のモデルよりも、権力分有における公式の制度に重心をおき、代表例としてのベルギーについても、連邦化をめぐる政治主体間の調整メカニズムとその効果に分析の焦点が移動した。

言語対立を政治的に鎮静化させる過程で生まれた連邦国家への移行には、複合的な調整方式「ベルギーメソッド」が活かされているとして評価される一方で、従来の主要主体に有利に働く方法で新しい課題に必要な議論が弱められたり回避されたりする側面があることも指摘されている。憲法上は連邦国家という言葉が記される以前に出版された、フィッツモーリスの初版本で示されているこの評価は、今日に至るまで引き継がれている。紛争の平和的調整が政治の停滞や信頼性の低下を招いている点は、20世紀末の新政党ラッシュと右翼ポピュリスト政党の進出により、ますます深刻な問題として認識されている。

- 5) 研究者の人的交流は、オランダ語系の政治学会とフランス語系の政治学会の協力によるシンポジウムの定例化にもつながっている。
- 6) 1991年選挙は、反移民を訴える新しい右翼政党が台頭する「黒い日曜日」として記憶され、その後のオランダ語地域のフラームス・ブロックの順調な拡大は、1999年選挙でのもう一つの衝撃と相まって、言語対立を潜り抜けたかみえたベルギー政党政治の正統性の危機を決定づけた。それまで長期にわたりオランダ語系第一党であり与党の座に居続けていた、キリスト教民主党の敗北と下野、それに代わって公開性と参加を呼び掛けた自由主義政党の勝利が1999年選挙の結果であった。政党と有権者とを繋いでいた関係性が希薄になり、もはや政党が多くの有権者の利益の代表として機能していないこと、有権者の意思と政党の行動が乖離していることが指摘される。そしてそれはこれまで構築されてきた制度の硬直化が問題なのか、有権者レベルで新しい政治文化が誕生して代表制の性質が変化したことによるのか、今日の先進国に共通する民主主義の問題を提起しつつ、代表制と政治参加についての研究成果を提示しようとの試みがなされている。
- 7) ヨーロッパの平和が自国の存続を左右することを、歴史的に身をもって経験してきた小国が、独仏の狭間でヨーロッパ統合の事務的な中心となり、ベルギーの政治

家はそれを最大限活用して、統合が頓挫しないように働きかけてきた。戦後間もないスパークからティンデマンス、欧州理事会常任議長の経験者であるファン・ロンプイ (Van. Rompuy, H.) やミッシェル (Michel, C.) まで、歴代首相が国際社会の調停者の役割を果す機会は多い。

- 8) ベルギーの政治史研究については、カトリック政治史の第一人者のヘラルドが、研究が「タコツボ化」を脱して国際化していること、質的分析と量的分析の組み合わせが進んでいることなどについて、高く評価している (Gerard & Verleden 2005)。ベルギー政治史については、現代史研究の代表誌としての、「ベルギー現代史雑誌 (Revue belge d'histoire contemporaine/Belgisch Tijdschrift voor Nieuwste Geschiedenis)」を中心に、多くの研究論文が掲載されていた。また、ベルギー政治史研究のなかで、確固たる一領域を築いている大戦史研究については、ドイツ軍への協力者やユダヤ人問題をテーマとして、研究の蓄積が多い。現在では、「戦争と社会についての中央研究センター (CegeSoma)」が文書館の役割を続けるほか、以前は独自で発行していた雑誌を前述のベルギー現代史雑誌と合流させる形で、研究成果を発信している。

参考文献

- Brans, M., De Winter, L. & Swenden, W. (eds.). (2009). *The Politics of Belgium, Institutions and Policy under Bipolar and Centrifugal Federalism*. London: Routledge.
- Calwaerts, D. & Reuchamp, M. (2020). "Still Consociational? Belgian Democracy, 50 Years After 'The Politics of Accommodation'". *Politics of Low Countries*, 2 (1): 28-50.
- Deschouwer, K. (2009). *The Politics of Belgium, Governing A Divided Society*. New York: Palgrave Macmillan.
- Deschouwer, K. (2012). *The Politics of Belgium, Governing A Divided Society*. (2nd edition). New York: Palgrave Macmillan.
- Deschouwer, K. (ed.). *Mind the Gap, Political Participation and Representation in Belgium*. London: Roman & Littlefield.
- Dewachter, W. & Das, E. (1991). *Politiek in België, Geprofileerde Machtverhoudingen*. Leuven: Acco.
- Fitzmaurice, J. (1983). *The Politics of Belgium: A Unique Federalism*. London: Hurst & Company.
- Fitzmaurice, J. (1996). *The Politics of Belgium: A Unique Federalism* (2nd edition). London: Hurst & Company.
- Fox, R. C. (1994). *In the Belgian Château, The Spirit and Culture of a European Society*

- in an Age of Change*. Chicago : Ivan R. Dee.
- Gerard, E. & Verleden, F. (2005). "Quelques aspects de l'histoire politique de la Belgique contemporaine", *CRHIDI cahier* (23-24) : 31-46.
- Huyse, L. (1975). Vijftien Angelsaksische auteurs over politiek, verzuiling en compromisvorming in België. *Res Publica*, vol. 17 (3) : 413-431.
- Huyse, L. (1970). *Passiviteit, passificatie en verzuiling in de Belgische politiek : Een sociologische studie*. Antwerpen : Standaard Wetenschappelijke Uitgeverij.
- Huyse, L. (1987). *De verzuiling voorbij*, Leuven : Kritak.
- Lijphart, A. (1968). *The Politics of Accommodation : Pluralism and Democracy in the Netherlands*. Berkley : University of California Press.
- Lijphart, A. (1969). "The Consociational Democracy", *World Politics*, 21 (2) : 207-221.
- Lijphart, A. (1975). *Democracy in Plural Societies. A Comparative Exploration*. New Haven : Yale University Press.
- Lijphart, A. (ed.) (1981). *Conflict and Coexistence in Belgium : The Dynamics of a Culturally Divided Society*. Berkeley : University of California.
- Lorwin, V. (1966). Belgium : Religion, Class and Language in National Politics. In R. Dahl (ed.), *Political Oppositions in Western Democracies*. New Haven : Yale University Press : 147-187.
- McRae, A. (1986). *Conflict and Compromise in Multilingual Societies : Belgium*, Ontario : Wilfrid Laurier Press.
- Van Haute, E. & Wauters, B. (2019). "Do Characteristic of Consociational Democracies Still Apply to Belgian Parties?", *Politics of Low Countries*, 1 (1) : 6-26.
- Van Istendael, G. (1989). *Het Belgisch Labyrint : De Schoonheid der wanstalgheid*. Amsterdam : De Arbeiderspres.
- Zolberg, A. (1977). Splitting the Difference : Federalization without Federalism in Belgium. In M. J. Esman (ed.), *Ethnic Conflict in the Western World*. New York : Cornell University Press : 103-142.

* 本研究は、2019年度関西大学学術研究員研究費によって行いました。